

真鍋昌弘著

『田植草紙歌謡全考注』

田中瑩 一

本書は「田植草紙」の全歌章（田植草紙）に欠ける朝歌一番は「高松屋古本」による。に詳細な注と考説を施したうえに「田植草紙」の性質を種々の面から解説した序章ならびに研究文献目録、歌謡初句索引を附したA5版一千頁をこえる大著である。本書成立の経緯は巻頭に置かれた吾郷寅之進氏の序文にくわしい。それによれば氏が著者に「田植草紙」の研究をすすめられたのは昭和三十二年秋のことであったという。筆者も又ちょうどその頃「日本古典文学大系中世近世歌謡集」に入った志田延義氏校注の本文によってこの歌謡に接し、新鋭詩人の登場に際したような興奮を味わった記憶がある。まもなく筆者は田唄研究会や歌謡学会を通じて著者と面識を得るようになったが、「田植草紙」全考注の計画を漏らされた時にはこの難解な歌章に注解を加えることが可能であろうかと一抹の不安を感じたものである。やがて全考注は本誌第三十二号（昭和四十三年二月号）から掲載されはじめ、筆者は以前不安なほどを感じたことを深く恥じることになった。綿密な校合と豊かな類歌・関係資料の援用を基礎とした国文学的に正統な研究方法、な

らびに独自の研究上の着眼点が相呼応して「田植草紙」は現代に生きかえったと思われた。以来、各誌に発表される月ごとの続稿を鶴首して待ったのはけつして筆者一人ではなかった筈である。今回それら旧稿を補訂し、未発表の晩歌以下の部分を加えて『田植草紙歌謡全考注』は全容をあらわした。（旧稿に『田植草紙全考注』とあったものを今回『田植草紙歌謡全考注』と改めたのは「田植草紙」を読むことが必然的に周辺歌謡全体を視野に入れることになったためと考えられる。）吾郷氏の序文に言う。「田植草紙の全歌章についての注釈は本書において始めて成し遂げられたものであり、今後の田植草紙の繙読、研究に与える便益はきわめて大きなものである。おそらく、今後すくなくとも当分の間、本書の注釈に大きな改変・訂正が加えられることはあるまいと思われる。」筆者も同感である。まさにこの仕事は「成し遂げられた」と呼ばれるにふさわしい。

本書には大正末年「田植草紙」発見以来のこの歌謡に関する諸学者の研究成果が著者の評価を加えてほとんど余すところなく汲み入れられ、著者自身の研究的立場にもとづいてそれぞれ位置づけられている。著者の立場は序章の一「田植草紙歌謡の文芸」に具体的に述べられている。著者はこの歌謡は様々な要素を未分化のまま内在させているので「和歌の如き純粋な古典文芸としての文芸とは趣を異にしている所もある」とし、諸要素の立体的把握をわすれてはならないと言う。立体的把握の観点としてこの章では成立地盤、機能、文芸的特性の三点をあげる。成立地盤として

は特に中世末期のハレの田植儀礼、村人の生活、その背景にある自然などに注目すべきだと言っている。機能としては、呪術的機能、神事的機能、社交的政治的機能、娯楽的機能、労働促進機能、啓蒙教訓的機能などをあげている。文芸的特性としては呪術的機能と密着した象徴や幻想、物語的連鎖や連想、周辺歌謡を田植歌としてとり込む際の詩法上の魅力などに注目している。本書の考注は右のような総合的観点を持しつつ「諸本との歌詞の異同、語釈、意味、継承関係、出典」(はしがき一頁)等に関する考証の論理を透徹させようとした実践である。

「田植草紙」二番を例にその実践の一端を紹介すれば次の通りである。

〃一けさうのときにやまのはをみたれば

きりやろかすみやろ山のはをみたれば

きりがふかふてみせんのかしをたちまふ

あざのくもりハてろうかためのかもりか

あめがふろうとてみせんのかしの朝きり

みのかさはおいてをたちあれくもかハはれてゆく

〔注〕では記号〃や欠字衍字なども含めた表記の実態解説、関係諸本との校合をもとにした句意の決定、「やろ」という語法を手がかりとした成立期の推測などがなされ、「卯の刻」「弥山」の語にこめられた農民の心情を考証してそこにこの歌の呪的機能をとらえている。〔考説〕では弥山を歌う類歌を博搜し諸家の研究を事例で補強しながら紹介して〔注〕の不足を補ったあと、この

歌が「田植草紙」全体の構成の中で前後の歌とどう連鎖しているかを論ずる。「弥山の腰を舞う朝霧がうたわれ、前歌の朝日の歌と連続している」とし、又「後朝の別れをして帰ってゆく若者の道行の一場面として、物語的に設定することもできるであろう。」と述べ、「水川古本」の「霧が深いで思ひの殿御が隠たれ」というオロシをひいている。朝歌一番の忍び歌から、朝、戸をあけて男を送り出し(一番)、男が霧の中へ歩み去り(二番)、やがて草刈りの野にあらわれる(三番)といったようにつないで読もうというのである。物語的連鎖のおもしろさというのはこれであり、又、一見自然寸描としか見えないこれら一連の歌草のあいまに恋の男女のイメージがうかびあがるところに象徴、幻想のおもしろさがあるとする。(著者は別のところで、「閑吟集」の小歌には「おもしろし」の語が見当たらないのに「田植草紙」には十四例も見られることなどをも一つの手がかりとして、「田植草紙」を「おもしろしの文学」としてとらえることを提案している。——二九三頁)一方この歌の背後には「朝霧深きは日和」など天気占いの俗信に見られるような生活の知恵が隠されていることを幅広い文献によって考証し、この歌の教訓的機能とその内に込められている村人の生活を明らかにしている。つまりこの歌の表現に見られる自然讚美を右のような背景を含んだ総合的なものとして鑑賞しようとするのである。

これが「田植草紙」歌謡をできるだけその生きていた時代そのままの姿で、そのままの心情でとらえようとする良心的な方法の一つであることは言うまでもないことで、思わず膝を打つあざや

かな成功例は、右の他、一四番、一五番、五九番その他枚挙にいとまがない。しかし一方において右の方法の意図するところを常に成功させるためには、幾多の障害を克服せねばならないことも又明らかである。本書の考証が今日望み得る最高のレベルに達したとは言っても、得られた文献には様々な質のものがあつて一率に評価することにちゅうちょを感じる場合があるし、それらを援用してもなお、かなりの部分を著者ならびに読者の主観に直観に頼らなければ「田植草紙」の姿は見えて来ないのである。その点をとらえて本書の方法上の限界を指摘することができないわけではない。たとへば、本書と相前後して主梓された渡辺昭五氏著『田植歌謡と儀礼の研究』は本書の方法に対する一つのアンチテーゼの書と見ることもできる。氏はその研究意図を「田植歌が——田中

注）謡われるようにならねばならなかった現象を現象たらしめ今日まで存続させてきたもの、すなわちそれを培い養ってきた背景の供給源を凝視したことであつた。」（同書九三七頁）と説明している。いわば田植歌を、それを生んだ農民の心情の一番奥のところへ投射してその投影図として読もうと言うのである。一方又、渡辺氏の方法とはちょうど対照的な位置に、時代的な背景にはあまり拘泥せず、それを現代読者の精神に投影させ現代の詩精神にどのような衝撃を与えるかという関心に支えられて読もうとする立場がある。塚本邦雄氏や新間進一氏らのこれまでの発言はこの立場のものであり、筆者もかつてこの立場から発言をしたことがあつた。今かりに三様に分けたが、これらはそれぞれが一つの読

み方であつて、一方が成立すれば他方が否定されるというものではない。それぞれが相呼応することによって著者の言う総合的理解が果されるべきものであろう。その際本書の方法がいわば原点になり、これからも多様に試みられるであろう「田植草紙」歌謡の新しい読み方は一度はここへ帰つてから踏み出さなければならなくなるものと考えられる。

限られた誌面で紹介するには本書はあまりに豊かであるが、以下、「田植草紙」歌謡の研究に本書が新しく附け加えたものを、目につくまま若干例示する。まず、詩句の解釈について次のような新見がある。①三九番へ鴛鴦の思ひ羽一すげ得たや頼みに。鴛の思ひ羽は劍羽とも言い、「曾我物語」巻五に王に殺された夫婦が鴛鴦となつてその思ひ羽で王の首を落すという説話があること、「歴世女装考」に鴛鴦の思ひ羽を恋の成就、夫婦和合の護符として鏡台や鏡筐に入れる俗信が書きとめられていることなどを考証し、このオロシの背景に庶民生活の息づきを通わせることに成功したこと。②七五番親歌でへ衣の袂に何やろ、と問いかけ、子歌でへ墨、硯、筆、……と答えるのは、「肩、袖、裾、腰……」と帷子などの部分をあげ次々とその絵模様をうたいあげる踊歌の一種の図柄尽しの歌章に類似していることを例証し、この歌の京憧憬の内実を明らかにしたこと。③一三一番へ空色の檜扇に月の輪を画いたと。空色の地に月の意匠が戦国武者の扇に好まれたものであつたことを「平家物語」「源平盛衰記」「出陣聞書」「軍陣聞書」「随兵次第」などによって考証し、さんばはいや田主に武將

のイメージを重ねてうたうところなどにもあらわれている「田植草紙」歌謡全般の武者好みの美意識の表われとしてとらえたことなど。次に、詩型や構成、組織の認識について次のような新見がある。④親歌、子歌かけあいの原型を呪的、儀礼的な問答唱和にあると見（これは土橋寛氏『古代歌謡の世界』の所説を敷衍したものとしよう）、親歌の間に答える歌は祝いの精神で、こうあってほしい状態を歌うのが基本であるとした。そうしてこの二つのものがかもし出すものをさらに発展させてゆく唱謡形式がオロシであると見たこと。（渡辺氏前掲書もほぼ同意見。）⑤二〇番のようにオロシの数が多いことは田植の実際から考えてその能率を下げたと考えられるが、ハレの儀式の中の文芸としては必ずしも不自然でなかったし、田植の場から離れて双紙の上で読まれるための（いわば机上の）文芸として見ることもできるとしたこと。⑥朝、昼、晩歌各冒頭の一定の主題に統一された、田植歌の組織の中で重要なポストを占める役歌であるとして重視したこと。⑦「田植草紙」は冒頭に朝日長者の歌を置き、末尾にしゅつもり長者の歌を置いているが、ハレの儀礼における田人の意識では長者伝説は現実の田主（豪農）に重なりあった筈だと考えて、「田植草紙」に全篇を田主讚歌集として定着させようとする意図が見られると指摘したこと。など。第三に、詩句の伝承関係における「田植草紙」の独自性の指摘に次のような新見が見られる。⑧和歌、物語の表現を一段ひねって独自性を出していると見たこと。一一六番へたちくせに迷ふは鳴の

羽風に。和歌、連歌では「鳴の羽擽」が常套。三一番関連歌「金井坐本」の「細子あゆめや葛の細道。「葛の細道」は伊勢物語にさかのぼるが、業平の分け入った宇津の山の葛の細道に「田植労働者の一員であり、しかも呪的人物であり、また美しく田人の心をとらえる幻想の人でもあった」おなり人を配した。など。⑨中古以来の伝統的農耕神事歌謡の表現を中世小歌的に歌い変えていると見たこと。三六番へ手に盛り入れて御所へ参らうやれ。「風俗歌、荒田」以下先行歌すべて「宮へ参らう」である。「御所へ参らうは中世小歌の表現で、「鶯保教狂言伝書小舞ノ兎角子供達は」に見られる。など。⑩中世小歌のとり入れに際しても又田植歌らしい歌い変えがあると見たこと。九四番は「閑吟集」二六番（同類歌は狂言歌謡、踊歌等にも）と類似しているが、花を慈しむ心は共通でも「田植草紙」は「閑吟集」のように「鳥を追う」とは歌わない。「へ花漏らすなや」と呼びかけながら、梅の花に遊ぶ鶯を美的なものとして、さらに呪的なものとして見聞する村人の心がよくあらわれている」と見る。一一二番は「閑吟集」二一七番の類歌だが「閑吟集」の小歌が、結果としては、一つの点を深くほりさげ、その底にあるものを突いているとするなら、『田植草紙』の歌謡はその精神的な深さが少ないかわりに、周囲に、即興的に、ぴちぴちとはじけて飛んでゆく連想の波紋をつくっているのである。」とその相連を説明する。など。

終りに、本書を通読して筆者が感じた疑問を一つだけ附記する。それは校異のための「田植草紙」関連諸本の引用が無秩序のよう

に見える場合があることである。伝承地域や歌章組織などから見た「田植草紙」との親疎、書写の新旧、伝来の経緯、あるいは類句本文の「田植草紙」該当本文との文脈の類似度など、校合諸本の間と比較能力の差があるわけだから考注の目的に応じてそれぞれ引用の論理が通っている必要がある。たとえば五九番の子歌「斗の枡に斗概に俵持ち来たり。の類歌には「とかきに」と歌うものと「とかけて」と歌うものとある。本書は「とかけて」の「金井坐本」をまずひき、以下「ぞうこくや本」「上佐屋本」「植歌」「雑誌」「大哥双紙」の順で類句をひくがこの内「植歌」以外はすべて「とかきに」である。これら諸本をこの順にひく理由が筆者には分らない。他の歌の考注にしばしば引用されている「上大江子本」は「とうの枡とうかけに」と、一、二句の間に「に」の入らない類句を持ち、リズムの上から注目すべき一本と思われるが、ここで黙殺されているのも不審である。本書には「田植草紙」歌謡一般を大きくひとまとまりにとらえる態度が感じられるが、

関連諸本の「田植草紙」との親疎の問題については友久武文氏をはじめ諸家の研究業績が積まれているし、本書でも七〇番その他の考説で論じられているのだからその観点が引用類歌の評価にも一貫して及ぶべきであったかと思われる。一方、四九番の親歌「鶯々舞い上がれ鼠焼いて突き上げて。に校異を示さなかつたのも不審である。ここは諸本すべて「つきあけう」であり、「田植草紙」の表現は孤例である。本書がこれと同じ発想のものとして示す童歌も又すべて「……よう」の形をとっていることでもあり、ここはぜひ解説のほしいところ。山内洋一郎氏編「田植草紙総索引」の校訂本文は諸本により「上げう」としている。本書は類歌の引用多く、一種の関連歌謡資料集としての用途をも果すと考えられるだけにこのような観点からの整備をも希望するものである。(昭和四九・九・二〇)

(たなか・えいいち 島根大学助教授)